

# 資格試験対策の授業における、「タスク」を用いた発信型英語の指導

## —アウトプットを意識したリスニング問題作成プロジェクトの試み—

蓬 菜 朋 子

キーワード：タスク 英語リスニング 資格試験 TOEIC

### 1. はじめに

本学の共通教育での授業「English for TOEIC」は、4学部の1年生が必修科目の一つとして履修している。この授業のねらいは、TOEICをはじめとした、英語の資格試験の対策を通じて、リーディングとリスニングを中心とした英語力を総合的に向上させることである（表1）。筆者の授業の履修生は、自宅学習として株式会社アルクが配信しているe-learning教材(アルク・ネットアカデミー)を取り入れ、習得語彙数を増やし、TOEICに特化したリスニングとリーディングの実践的な問題に数多く触れることによって得点力のアップを図っている。

本稿の目的は、筆者の英語演習授業「English for TOEIC」において、履修生が取り組んだTOEICリスニング問題作成の「タスク」の実践内容を紹介し、そのプロジェクトに参加した学生の感想、資格試験の問題に対する意識や、履修後の資格試験受験への意識を尋ねた質問紙調査をもとにした分析を中心に報告するものである。

表1：信州大学 平成22年度「English for TOEIC」共通シラバス（ねらいのみ抜粋）

#### (1) 授業のねらい

TOEIC を始めとする英語の資格試験の対策を通じて、リーディングとリスニングを中心に英語力の総合的な向上をねらいとする。具体的には、TOEIC では 600 点、TOEFL では 500 点に相当する英語力の養成をめざす。その際、総合的な英語力の向上に役立つ文法や語彙力のアップもめざす。

### 2. タスクを用いた英語教育の背景

英語教育用語辞典（2009）では「タスク」を「特定の目的を達成するために行う作

業や活動。外国語教育においては、言語習得を目的として行う課題や作業。」と定義している。松村（2009）は、第二言語の指導に関連して、近年、「タスク」ということばがよく使われるようになったが、研究者によって重視する側面に違いはあるものの、おおむね、以下の3つの条件をすべて満たすものが第二言語教育の文脈で当てはまるとしている<sup>1</sup>。

- ① 意味のやり取りに焦点を当てた活動であること。
- ② 課題としてのゴールを持つ活動であること。
- ③ 自然な言語使用の際と同等の認知プロセスを要求する活動であること。

タスクを用いた英語教育は、Prabhu. N. S.が1980年代にインドにおいてBangalore projectを施行してから、Task-Based Approachとして、タスクを用いた教授法の理論やその実践効果等をTask-Based Language Teaching/Learningとして語学教育の一分野として数多く研究されている（Willis and Willis, 2007など）。松村（2009）は「タスクを効果的に用いながら、さまざまな技能を統合した形で授業を進めていこうと技能横断型の指導が今日では主流になっている」としている。

### 3. 信州大学の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）における、「English for TOEIC」の位置付け

信州大学では、学士課程に共通する学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めており<sup>2</sup>、その中の「言語能力」においては「日本語および外国語を用い、的確に読み、書き、聴き、他者に伝えることができる」とある。

TOEICはTest of English for International Communicationの略称で、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテストとして、米国にある非営利テスト開発機関のEducational Testing Service(ETS)が開発・制作している（2011, (財)国際ビジネスコミュニケーション協会）<sup>3</sup>。このテストは、世界約90ヶ国で実施されており、年間約500万人が受験、日本においては2009年度には年間168万人が受験していることが(財)国際ビジネスコミュニケーション協会から発表されている。形式は、リスニング（45分間・100問）、リーディング（75分間・100問）の合計200問を2時間で答えるマークシート方式の一斉客観テストである。このため、試験対策の授業となると、TOEICの出題形式から、英語の「聴く、読む」ことを中心とした受容技能(receptive skills)の向上に重点が置かれる傾向にある。しかし、筆者は、「English for TOEIC」の授業において、信州大学のディプロマ・ポリシーの「言語能力」をカバーするべく、学生がTOEICリスニング問題を作成する「タスク」に取り組む中で「的確に書き、他者に伝える」表出技能(productive skills)も含む活動を取り入れた。

### 4. TOEIC リスニングテスト

TOEICでは、4種類のリスニングテスト（Part 1. 写真描写問題 10問、Part2. 応答問題 30問、Part3. 会話問題 30問、Part4. 説明文問題 30問）から構成されている。そのうち、Part 1. の写真描写問題は、1枚の写真について4つの短い説明文（表2）が1度だけ放送されるがその説明文は印刷されていない。受験者は4つの説明文のうち、写真（図1）を最も的確に描写しているものを選び、解答用紙にマークする。このパートは、他のパートに比べて扱う英文が短く（単文または重文）、モノローグを使用していることから、学生が個人で取り組むことができるタスクとしてリスニング問題作成プロジェクトに適用することは妥当であると判断した。

表 2: TOEIC リスニング問題 Part 1 で放送される説明文

- |  |
|--|
| A) They're leaving the room.<br>B) They're turning on the machine.<br>C) They're standing near the table.<br>D) They're reading the newspaper. |
|--|

**Directions:** For each question in this part, you will hear four statements about a picture in your test book. When you hear the statements, you must select the one statement that best describes what you see in the picture. Then find the number of the question on your answer sheet and mark your answer. The statements will not be printed in your test book and will be spoken only one time.

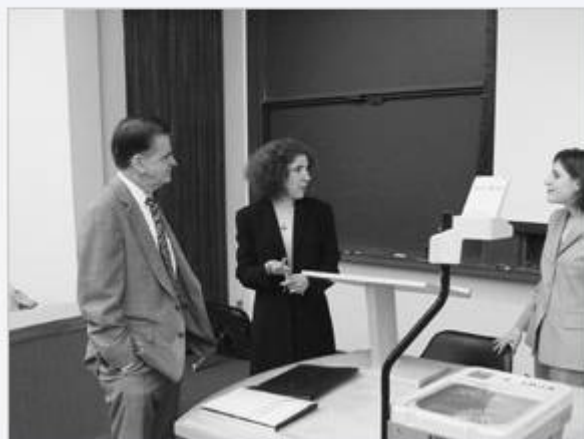


図 1: TOEIC リスニング問題 Part 1 のサンプル

## 5. リスニング問題作成プロジェクトの手順

前述のTOEICリスニングテストのPart1で扱う、写真の描写問題の特徴を踏まえて、学生に課したリスニング問題作成のタスクでは、写真の被写体を的確に英語の単文あ

るいは複文で正確に描写・説明する力を養う。問題作成に当たっては妥当性に注意しながら、4つの説明文を完成させる。また、英文の音読を録音するにあたり、リズムやイントネーションなど英語の音声的な特徴、読む速度、声の大きさなどを注意して発話できるように指導する。プロジェクトは、次の要領で実施した。参加者は、筆者の平成22年度「English for TOEIC」の授業の受講者34名(男子25名 女子9名)である。

- ① 学生は一枚の写真を用意する。－各自がデジタルカメラ、または携帯電話のカメラ機能で撮影する。
- ② その写真を描写する英語のセンテンス（正解文）と、その他ダミー（写真とは一致しない、不正解の文）の英文センテンスを3つ作成する。
- ③ 写真と4つの説明文を筆者に電子メールで事前に送信して、筆者と録音のAppointmentを取る。
- ④ 筆者との研究室でのAppointmentでは、各センテンスに文法などの誤りがないか、問題に妥当性はあるかをチェックし、音読の際の発音を指導する。
- ⑤ 録音した4つの説明文の音読は、筆者が音声ファイルとして編集し、提出された写真ファイルと共に提示できるように処理する。
- ⑥ 各授業の一部で、数名の学生のオリジナル問題をスクリーンに映しながら、音声を再生し、履修生は実際のTOEICテストと同じ手順で、配布されたマークシート用紙に解答する。

## 6. 質問紙調査の回答結果と考察

リスニングプロジェクトへの参加終了後、質問紙調査の回答を31名(男子22名、女子9名)から得た。質問紙の結果はパーセンテージで示すこととする。複数回答を可として、全体の6割前後の支持を得たものは、次の上位2項目であった(表3)。最多数の回答は「問題を作る側の視点が分かった。」で、61.3%であった。学生の写真や説明文によっては、TOEICリスニングテストとして妥当性を欠くもの<sup>4</sup>があり、その場合は学生に再提出を求める場合も少なくなかった。参加者は改めてTOEICで使用されている写真にはどのような被写体が使われているか、どのような説明文を作成したらよいか、などを再考する機会が得られたと思われる。次に多かった回答は、58.1%で「友達の問題を見る・解くのが面白かった。」であるが、これは問題作成者自身が被写体になったり、写真に各学生の個性も表れていたり、と市販のテキスト等で使われる写真とは違うことから、履修生のモチベーションを高めることに貢献したと思われる。

表3：プロジェクトに参加しての感想(複数回答可)

(1) リスニングプロジェクトに参加して	
1位「問題を作る側の視点が分かった。」	61.3%

2位「友達の問題を見る・解くのが面白かった。」	58.1%
-------------------------	-------

さらに、クラス内でリスニング問題の発表まで終えた学生のうち、71.4%は、「TOEICの問題への親近感がわいた。」、64.3%が「文を正しく書く訓練になった。」と回答している。これらに関しては、筆者とのアポイントで問題の妥当性の確認や、4つの説明文（英文）の添削などを受けている影響もあるように思われる。

また、質問紙での自由記述については、筆者が次の3項目に分類した（表4）。

①「audience（クラスメイト）を意識してタスクに臨む」

②「問題作成の効果」

③「説明文の音読の録音」

①では、アウトプット（表出）の目的が、聞き手や読み手を意識したものであるから、このような意識を持つことは大変に重要である。①の回答から、このプロジェクトでそのことに気付いてタスクに臨んでいる学生がいたことが分かる。②には、問題作成の「達成感」や「反省」が垣間見られる。今回は、一人が一回の発表のチャンスしかなかったが、余裕のある学生には複数回、発表できる機会を与えることにより、さらに効果が得られるのではないだろうか。これは今後のリサーチへの示唆としたい。③は、録音時の発音指導を振り返ると、中学・高校時に音読の習慣がある学生とそうでない学生がいることが分かった。また、録音した自分の声を聞くのは今回のプロジェクトが初めである学生も少なくなかった。自らの英語の発音を客観的に聴く良い機会にもなったようである。音読は、英語のアウトプットやスピーキングへの橋渡しとして、今後、授業で積極的に効果的に取り入れていく必要があると思われる。

表4：自由記述での受講生の感想

① audience（クラスメイト）を意識してタスクに臨む

- 「クラスの人達に問題を見せるということで、より正しい英文を作ろうという気持ちが強くなり、勉強になった。」
- 「やはり、録音した自分の声が、授業中流されるのは少し恥ずかしい。しかし、そのために上手く話そうと努力するからよい結果につながり、全体的にいいと思います。」

② 問題作成の効果

- 「自主性が試されるので、(略)、そこはしっかりやった方がためになるし、いいと思う。」
- 「問題作成は一回だけでなく、より多くの機会を得た方がいいと思う。」
- 「問題を作るのは、意外に面白かった。」
- 「問題を作ることにより、新しい単語を覚えられたり、英作文をすることにより、違った視点で英語力を上げられるのがいいと思った。」

- 「問題を作る難しさが分かった。」
  - 「もう少し、よい問題を作ればよかった。」
  - 「面白い写真を披露しようと頑張った。」
  - 「自分の力で問題を作成できてよかった。」
- ③ 説明文の音読の録音
- 「声を録音する時、発音が難しかった。」
  - 「英語を初めて録音して、良い体験ができた。」
  - 「録音で、発音の未熟さを知った。」

表5では、履修生のTOEICテストについての意向をまとめている。対象学生の所属する学部はTOEICの定期的な受験を必須としていない。大学入学時には、「TOEICの名前は聞いたことがあるが、テスト内容は知らない」という学生が大半を占めるが、質問紙調査の時点で、テストに興味を持つ学生が80%を超えている。また、2年次への進級前にTOEICの受験の意向を示している学生は50%を超えた。そして、就職活動までには90%以上が受験を考えている。これは、自宅学習で取り入れているe-learning（ALCネットアカデミー）のクラス全体の進捗率が平均で65%を超えている（平成23年1月現在）ことも、受験への準備が進んでいることを示しているといえる。

表5：TOEICテストに関する質問項目に関して

	YES
1. 「平成22年4月からの「English for TOEIC」の授業を通して、TOEICテストに興味を持ちましたか？」	80.1%
2. 1学年での「English for TOEIC」受講後の春休みにTOEICテストを受験しようと思いませんか？」	51.6%
3. 「就職活動が始まるまでにTOEICテストを受験しようと思いませんか？」	90.3%

7. まとめ

本稿では、信州大学の学士課程に共通する学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の中の「言語能力」の向上を目的として、筆者の共通教育での英語演習授業「English for TOEIC」で履修生が取り組んだTOEICリスニング問題作成の「タスク」の実践内容を紹介し、学生への質問紙調査の分析を中心に報告した。

リスニング問題作成プロジェクトでは、英語で「的確に書き、他者に伝える」表出技能 (productive skills) を伸ばすタスクに、学生が個人で取り組み、授業において個々が作成したリスニング問題をクラス全員で「聴いて、回答する」活動を実施した。

このプロジェクトを通して、履修生の6割は出題者側の視点でTOEIC形式 (Part1) の問題を見るようになることが分かり、その「タスク」の効果も分析することができた。授業「English for TOEIC」に発信・参加型のタスクを加えたことで、リスニング問題や、TOEIC受験へのモチベーションが高まることも明らかになったと言える。

今後は、学部や習熟度レベルの違いによるプロジェクトへの関心の度合いや、その波及効果等についても検証していきたいと考えている。

---

#### 注

<sup>1</sup> 松村 (2009) は、タスクが取り組みの中で自然な言語使用の際と同様の認知プロセス(頭の働き)が促されるのであれば、一般に有効なタスクとして受け入れられているとする (Nunan, 1999,2004) を挙げている。

<sup>2</sup> <http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general/recruit/pdf/diplomapolicy.pdf>

<sup>3</sup> <http://www.toEIC.or.jp>

<sup>4</sup> 例を挙げると、犬が上を見上げて座っている写真を撮影し、正解を “This is a dog.”として、その他のダミーの3文の説明文に “This is a pig.”, “This is a cat.”, “This is a bird.” とした問題を提出したのものには、被写体の動作を表す説明文を書くよう指導した。

#### 参考文献

- 1.松村昌紀 (2009) . 英語教育を知る 58 の鍵 大修館書店
- 2.Prabhu, N. S. (1987). Second Language Pedagogy. Oxford: Oxford University Press.
- 3.Nunan, D. (1999) . Second Language Teaching and Learning. Boston: Heinle/Thomson
- 4.\_\_\_\_\_. (2004). Task-Based Language Teaching. Cambridge: Cambridge University Press.
- 5.信州大学 (2010). 平成 22 年度信州大学シラバス. 信州大学
- 6.白畑知彦, 富田裕一, 村野井仁, 若林茂則 (2009). 改訂版 英語教育用語辞典. 大修館書店.
- 7.Willis, D. and Willis, A. (2007). Doing task-based teaching. Oxford: Oxford University Press.

(信州大学 全学教育機構 助教)

2011 年 1 月 17 日受理 2011 年 2 月 23 日採録決定